平成三十年度夏季

全国大学国語国文学会 第一一七回大会案内・要旨集

期日　六月二日（土）・三日（日）

会場　二松學舍大学一号館中洲記念講堂（九段キャンパス）（一日目）
　　二松學舍大学一号館四〇一・四〇三教室（九段キャンパス）（二日目）

地下鉄東西線・半蔵門線・都営新宿線「九段下」駅下車、2番出口より徒歩8分
地下鉄半蔵門線「半蔵門」駅下車、5番出口より徒歩10分
JR中央線（総武線）、地下鉄有楽町線、東西線、南北線「飯田橋」駅下車、徒歩15分
JR中央線（総武線）、地下鉄有楽町線、南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅下車、徒歩15分

平成三十年度夏季

全国大学国語国文学会

第一一七回大会ご案内

○同封の葉書に出欠をご記入の上、五月二十八日（月）までに必ず到着するようにご返送下さい（**ご欠席の場合も必ずご返送をお願いいたします**）。

○六月二日（土）の、昼食代（一、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・六、〇〇〇円、大学院生・四、〇〇〇円）、レジュメ資料代（一、〇〇〇円）、六月三日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会二松学舎大学原研究室、口座番号／〇〇一三〇―四―七三一一八三）にて五月二十八日（月）までにお振り込み下さい。

○大会についてのお問い合わせ、出張依頼状が必要な方は、左記の大会（事務局）までご連絡下さい。

二松學舍大学　文学部国文学科　原研究室内
全国大学国語国文学会事務局・一一七回大会担当
Eメール　zenkoku.nishogakusha.h28to30@gmail.com

第一日　六月二日（土）

常任委員会（11時00分～11時30分）　一号館11階会議室
委　員　会（11時30分～12時00分）　一号館11階会議室

受付　12時30分～
開会　13時00分～
会場　中洲記念講堂【一号館地下2階】
開会の辞
会場校挨拶
会長挨拶

全国大学国語国文学会会長　中西　進

シンポジウム　「AI時代に大学、国語学・国文学は何をすべきか、何ができるのか」

将棋や囲碁、車の自動運転でよく知られたAIは、様々な分野に導入されようとしている。今後教授職をもAIに代わるかもしれない時代である。二〇四五年には、シンギュラリティと呼ばれるAIが人間の知性を超える技術的特異点に到達するともいわれている。果たしてAIが文学作品を作り、AIが文学・語学研究を行う時代は訪れるのだろうか。

そこで、今回は4人の専門家を迎え、語学・文学研究の役割、人のあり方を見つめ、未来への我々の役割について探っていく。

コーディネーター／
二松學舍大学教授　塩沢　一平

基調講演（13時15分～14時10分）

「AIとは、AIの現在・未来」　株式会社ドワンゴ　人工知能研究所所長・NPO法人全脳アーキテクチャ・イニシアティブ代表　山川　宏

「AIと教育、AIと大学の現在・未来」　大学経営戦略研究所代表　元桜美林大学大学院教授　船戸　高樹

休憩14時10分～14時20分

基調講演と朗読（14時20分～15時15分）

「技術革新と語学・文学」　早稲田大学教授　石原　千秋

朗読　「夢十夜」　漱石アンドロイド

「AIとアンドロイド、アンドロイドと語学・文学」　二松學舍大学教授　増田裕美子

休憩15時15分～15時45分

ディスカッション　15時45分～17時00分

懇親会（17時30分～）

会場　13階レストラン

会費　一般・六、〇〇〇円　大学院生・四、〇〇〇円

第二日目　研究発表大会（10時～14時30分）　A・B　2会場　401教室・403教室

A会場　401教室（10時00～12時15分）

貝原益軒撰『大和本草』「花草」類・「花木」類の分類意識―《植物の観賞》という概念の成立をめぐって―　大東文化大学大学院　郭　崇

讃岐守菅原道真の桜花詠―『菅家文草』巻四・二八六番詩を読む―　國學院大學兼任講師　笹川　勲

中関白家の零落―寛子に見られる受領階級の処世―　二松學舎大学大学院　大村　美紗

休憩（12時15分～13時15分）

（13時15分～14時30分）

細江逸記のヴォイス論再考　國學院大學兼任講師／大東文化大学非常勤講師　岡田　誠

天石屋戸と天孫降臨―アメノウズメとサルタビコ―　福岡女学院大学名誉教授　吉田　修作

B会場　第403教室（10時00～12時15分）

「読解力」の養成を目指して――森鷗外「舞姫」による実践報告　愛知県立知立東高等学校教諭　増田　祐希

文学を読むという行為―「古今和歌集」の歌に付される未来性―　創価大学助教　山本　美紀

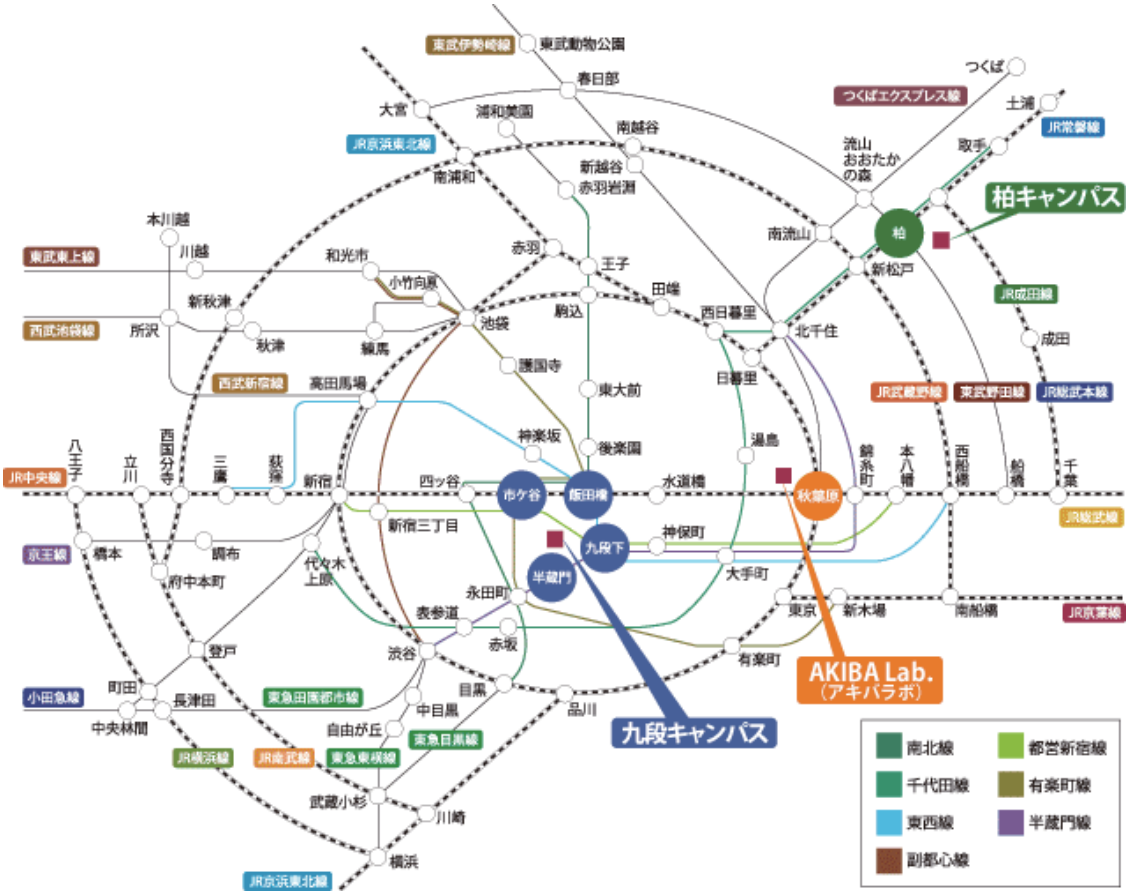
今に生きる「文学の力」を古典『竹取物語』の和歌の力に注目して考える
―『古今和歌集』仮名序の主張と韻文散文の特長をふまえつつ―　岩手大学教育学部准教授　田中　成行

A会場　401教室（14時45分～15時30分）

総会

授賞式（学会賞／『文学・語学』賞／研究発表奨励賞）

閉会の辞



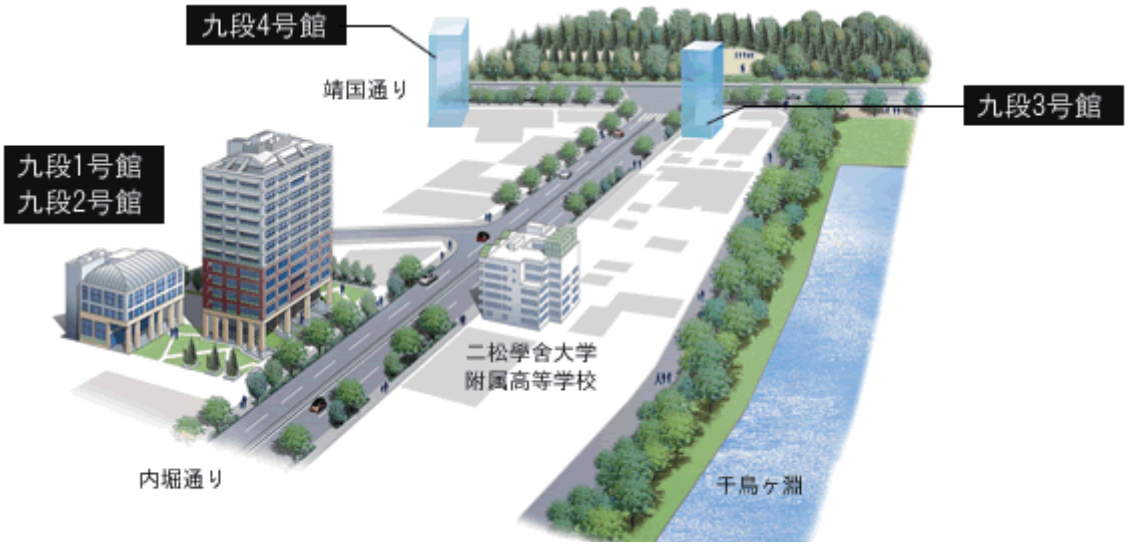
地下鉄東西線・半蔵門線・都営新宿線「九段下」駅下車、２番出口より徒歩８分

地下鉄半蔵門線「半蔵門」駅下車、５番出口より徒歩10分

JR中央線（総武線）、地下鉄有楽町線、東西線、南北線「飯田橋」駅下車、徒歩15分

JR中央線（総武線）、地下鉄有楽町線、南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅下車、徒歩15分

JR飯田橋駅
西口
交番
ファミリーマート
四谷駅へ
神楽坂駅へ
セブンイレブン
日本歯科大学
ホテルグランドパレス
富士見小学校
暁星高校
東京逓信病院
九段中等教育学校
北の丸スクエア
マクドナルド
地下鉄九段下駅
靖国通
2番出口
九段坂上交差点
靖国神社
ファミリーマート
ドトール
千代田区役所
二松學舎大学（九段4号館）
セブンイレブン
二松學舎大学（九段3号館）
日本武道館
外堀通り
靖国通り
セブンイレブン
ファミリーマート
カフェドクリエ
〒麹町郵便局
セブンイレブン
二松學舎大学附属高等学校
科学技術館
JR市ケ谷駅
交番
ドトール
地下鉄市ケ谷駅A3出口
出口
三菱東京UFJ銀行
東郷公園
二松學舎大学九段1・2号館
内堀通り
北の丸公園
国立近代美術館
国立公文書館
千鳥ヶ淵
セブンイレブン
5番出口
地下鉄半蔵門駅
イギリス大使館
ダイヤモンドホテル
半蔵濠


九段4号館
靖国通り
九段3号館
九段1号館
九段2号館
二松學舎大学附属高等学校
内堀通り
千鳥ヶ淵

平成三十年度夏季

全国大学国語国文学会　第一一七回大会　研究発表会

【A会場　401教室（10時00～12時15分）】

貝原益軒撰『大和本草』「花草」類・「花木」類の分類意識

―《植物の観賞》という概念の成立をめぐって―

大東文化大学大学院　郭　崇

『養生訓』『和俗童子訓』等で知られる貝原益軒（寛永七〈一六三〇〉―正徳四〈一七一四〉）は、日本独自の本草学を樹立すべく、「民生日用」を目的とした本草学の実践と資料蒐集に生涯を捧げ、これを大成して宝永六年（一七〇九）八〇歳の時、『大和本草』十六巻、付巻二巻を刊行した。

『大和本草』は四百種以上の書目を引用する。そのうち引用回数が最も多く、内容・構成に甚大な影響を与えたのは、中国本草学の集大成とされる明・李時珍撰『本草綱目』である。その引用例は三百例以上にのぼるが、『大和本草』「総論」に「本草綱目に品類を分つに可疑事多し」と述べるように、『大和本草』の構成・分類は、必ずしも『本草綱目』をそのまま踏襲したものではない。

『本草綱目』が「部」「類」を立て、一八九二種の品目を一六「部」六〇「類」に分類するのに対して、『大和本草』は一三六四種の品目を三七「類」に分類する。両者を詳細に比較検討した結果、『大和本草』には『本草綱目』にはない独自の上位分類・下位分類が内在していることが確認された。

本発表では、『大和本草』「花草」類・「花木」類に、上位分類として《観賞用の草》《観賞用の木》という益軒独自の分類が内在し、そこには盆栽に関する記述が頻出することをあきらかにする。

このように、『大和本草』に《植物の観賞》という概念が定着した背景には、慶長十二年（一六〇七）四月、初代将軍徳川家康への林羅山の『本草綱目』献上（『徳川実記』台徳院殿御実記）に始まる江戸の園芸・盆栽ブームがあった。益軒自身も、自邸で花や野菜を栽培した経験に基づいて栽培法を詳述した元禄七年（一六九四）刊『花譜』三巻、宝永元年（一七〇四）刊『菜譜』三巻を著し、また、元禄十年（一六九七）宮崎安貞撰『農業全書』十一巻に「序文」を寄せている。これら三書の引用書目を視野に入れつつ、『大和本草』「花草」類・「花木」類の成立を論じる。

讃岐守菅原道真の桜花詠

―『菅家文草』巻四・二八六番詩を読む―

國學院大學兼任講師　笹川　勲

仁和二年（八八六）正月、菅原道真はそれまでの式部少輔・文章博士・加賀権守から、讃岐守に転じる。この任官は、道真の国司に任じられる歎きを詠んだ作品を根拠に、旧来は左遷とする説が多かった。しかし、歴史学の進展から、この任官は左遷ではなく、通常の人事異動、さらには道真の能力や識見を見込んでの抜擢というのが近年主流の見解である。道真自身も讃岐在国中の詩篇では、詩臣としての本分を果たし得ない憂愁のみならず、国司

として職務に精励しようとする熱意をも詠んでいる。また自らの詩篇をまとめて醍醐天皇に献じた際には、「今之所レ集、多是仁和年中、讃州客意、寛平以来、応制雑詠而已」と、奏状に記しており、讃岐在国中の詩篇には、詩人としての自負も見ることができよう。

巻四・二八六「詶下藤司馬詠二庁前桜花一之作上。押韻」（以下本作）は、道真の桜花詠のうち、唯一、讃岐の桜花を詠んだ作例である。道真の桜花詠は七首を数えるが、宇多天皇の側近として活躍した時代に詠まれた詩篇が収められる巻五に集中している。発表者は先に、『菅家文草』巻五・三八四「春、惜二桜花一、応レ製一首。并レ序」を中心に考察を加え、道真にとって宮中の桜花とは、宇多の帝徳と宮廷詩人としての自己規定の象徴であったと結論づけた（『國學院大學紀要』第五〇巻、二〇一一年二月）。しかし本作の読解については、自ずと異なった視点が要請されよう。

本発表では、歴史学や日本漢詩文研究における、道真の任讃岐守と讃岐で詠まれた詩篇の評価を確認した後、讃岐在国中の詩篇から読み取れる道真の詩境や、道真が影響を受けたとされる白居易の作品、特に新楽府「牡丹芳」の詩想との連関から、本作の表現を読み解いてゆく。その上で、都から離れた讃岐において、国司として地方行政の最前線にあった道真の、王沢讃美の詩臣とは異なった詩境を明らかにする。

中関白家の零落
―寛子に見られる受領階級の処世―

二松學舍大学大学院　**大村　美紗**

『枕草子』「大進生昌が家に」章段の背景に見られるように、中関白家が孤立していく過程の一つとして受領階級の権力者への寝返りを指摘することができる。しかし、その様相は『枕草子』には具体的に示されておらず、また当時の資料にもその詳細は記されていない。それでは受領階級出身者はどのように権力につながり一族の繁栄を試みたのか。

平惟仲の叔母寛子を中心に、受領階級の女性の生き方を取り上げ、それが摂関家の零落に間接的に関わることを示したい。

寛子（藤原）についての記録は多くないが、『九暦』に「喚故中納言平時望卿女子兼通旧室、先日預被仰此由、令奉仕乳付」とある記事からは、寛子が冷泉天皇の乳付であること、兼通の室であること、兼通と離縁したことが判明する。また『公卿補任』からは、「旧室」と記された翌年、兼通と有明親王女昭子王女との間に朝光の誕生していたことがわかる。これらの事実は、兼通と親王女との結婚に伴う離縁が、乳付選任の契機となった可能性を示唆している。この事例は一見、摂関家に翻弄されるように見えながらも、反面、その状況を利用しようとする寛子の姿が伺えるものと考えられる。

そこで本発表では乳付の選任基準を示し、また寛子の婚姻と離縁の関係性を明らかにする。さらに政治的背景を踏まえ、乳付とそれに関わる人々の処世を検討することで、摂関家を支え追従する一方で、時には裏切を見せる受領階級の姿を浮かび上がらせる。その結果として中関白家の孤立に、受領階級の処世のあり方が一

因として関わっていることを述べる。

細江逸記のヴォイス論再考

國學院大學兼任講師／
大東文化大学非常勤講師　**岡田　誠**

細江逸記は、英語学の泰斗として知られているが、国語学にも多大な影響を与え、戦前・戦後の論文等では「中相概念」、「き」「けり」の論で引用されてきた。特に、細江逸記の国語学として、「き」と「けり」との違いを論じた、細江逸記（一九三二）『動詞時制の研究』が頻繁に引用されているが、その国語学の背景を知るには、「中相」という概念を提唱した、細江逸記（一九二八）「我が国語の動詞の相（Voice）を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」（『岡倉先生記念論文集』研究社）にその原型があり重要である。その本文や脚注には参照した国語学者の説や参考文献が明瞭に示されているためである。しかし、参考文献として示されることが稀な論文として、大阪商科大学を定年退官する年に書いた晩年の細江逸記（一九四四）「我が国語の動詞の『諸相』（Voice）並びに動詞活用形式分岐の初期相に就いて」（『大阪商科大学・同経済研究所　経済学雑誌』第一四巻三号）の存在がある。その中で細江逸記は再び、ヴォイス論を論じ直しているのである。しかもそこでは、基本的な文法観は変わることはないものの、国語学の学識を深めている様相がわかるからである。この二つの論文は、細江逸記の国語学の研究を知る重要である。つまり、細江逸記の国語学の研究は、ヴォイス論から始まり、ヴォイス論で締めくくりとなるとともに、参考にしている国語学者の引用なども詳細に示され、ヴォイス・アスペクト・ムードの不可分という文法観が垣間見えているからである。

本発表では、近年では引用されることの少ない細江逸記の初期のヴォイス論と、参考文献でさえ示されることが稀な晩年のヴォイス論とを比較し、細江逸記の国語学の深化の様相を概観し、その淵源として、チェンバレン、岡倉由三郎から継承したものと、本居宣長、草野清民、山田孝雄から継承したものとから成立していることを指摘する。

天石屋戸と天孫降臨
―アメノウズメとサルタビコ―

福岡女学院大学名誉教授　**吉田　修作**

神代記によれば、アメノウズメ（以下ウズメ）は天石屋戸前で「神がかり」して「胸乳を掛き出だし」などの所作をしたとあり、神代紀では当該箇所を「俳優（わざをぎ）」「神がかり」とする。神代記ではウズメが天石屋戸の内部に隠もっているアマテラスと問答をし、アマテラスを天石屋戸の外部へ誘導する役割を果たす。天孫降臨条では途中の天八衢に神がいて、神代記によれば高天原、葦原中国の双方にまで及ぶ光を発し、神代紀によれば眼などが照り輝いているなどと記述されている。天つ神はウズメにその光を発する神に対応するように命じ、神代紀ではウズメが天石屋戸と同様の所作をした。その結果、ウズメとその天八衢にいた神が問答し、その神が国つ神でサルタビコと名告（の）り、天神御子の先導役となると約束をする。神代記ではサルタビコは最後に海に溺れる所作をしながら三つの御魂を化成して去っていったという。これらに関しては旧稿でも取り上げたが、本発表では再度検証を行う。

天石屋戸と天孫降臨が構造的に対応するという見解は既に提案されているが、それらの条に登場するウズメとサルタビコ、さらにアマテラスとがそれぞれ対応する位相を有していることが指摘できる。サルタビコが登場する箇所ではその光輝く様はアマテラスに匹敵するような記述がなされており、だからこそ、ウズメでなければ対峙できなかったのである。ウズメが天石屋戸前で行った所作を天八衢にいる神に対して行ったのはそのような理由による。また、ウズメはそれらの「俳優（わざおぎ）」「神がかり」の所作とともに、アマテラスともにサルタビコとも問答してそれらの神を誘導していくという役割を果たしている。一方でサルタビコは溺れるという「俳優（わざおぎ）」に相当する所作を行っており、その面でウズメと対応関係がある。

【B会場　第403教室（10時00～12時15分）】

「読解力」の養成を目指して
――森鷗外「舞姫」による実践報告

愛知県立知立東高等学校教諭　**増田　祐希**

新井紀子氏の『AI vs. 教科書が読めない子供たち』によると、現段階のAIにとって、文章の意味を理解することは不可能に近いといわれている。端的にいえば、国語が苦手ということだろう。

しかしPISA2015の調査では、科学的リテラシー、読解力、数学的リテラシーの各分野において日本は国際的に見ると引き続き平均点が高い上位グループに位置している一方で、前回の調査と比較して読解力の平均点が著しく低下している。ここでいう「読解力」は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組むこと。」と定義されている。換言すれば、単なる「読む力」だけを指すのではなく「考える力」、ひいては「書く力」と密接に関連しているのだ。

また、コンピュータ画面の一ページ目の表と二ページ目の文章の矛盾点を説明する設問においては、表と文章の読み取りが正確にできず、矛盾点をうまく説明できない誤答が目立った。二つの情報をそれぞれ整理して、比較や分析ができていないというのである。

以上のことをまとめると、AIの弱点である読解力が、そのまま子供たちの弱点にもなっており、そのために書く力や考える力も身につけられていないといえよう。今ある多くの職業がAIに奪われることが明らかになっている時代だからこそ、AIにできないことにも目を向け、将来子供たちがAIの代用品にならないための能力、つまり読み、考え、書く力を身につけさせる必要が高まってきている。

以上のような問題を意識して行った、小説教材である森鷗外の「舞姫」を読み、一友社から出版されている双葉はづきが描いた漫画「舞姫」と比較して、小説の主題を考え、レポートを書く授業について報告する。文学教材の意義を改めて問う試みにもなるはずである。

文学を読むという行為

―「古今和歌集」の歌に付される未来性―

創価大学助教　山本　美紀

文学と心はつなげて考えられているように思う。仮に、心を記号化することが文学であるとした場合、心を有さないと考えられるロボットには文学ができないことになる。しかし、Appleの提供するSiriや、SHARPから発売されているRoBoHoNを使用する時、人はまるで人と会話をするかのように悩み事を相談したり、頼み事をしたりしている。それは、人がロボットに心を寄せているということであり、文学行為であると解し得る。

SiriとRoBoHoNには機械学習（AIに類似）が使われており、膨大な数の情報を収集し、解析することによって、質問に対する最適な言葉を導き出している。RoBoHoNにいたっては、蓄積された情報を解析し、自ら話しかける機能も備わっており、まさに人が行っている、空気を読むという行為に類する。ロボットはその情報収集力と解析力の高さによって、人と同等かそれ以上の能力を持っているかのように捉えられる。

文学を読むという行為もまた、多くの情報調査やそれまでの経験を必要とする。とするならば、その能力が人以上に備わっているロボットは、人以上に文学を読めるということになる。しかし、人間にあってロボットにない力が一つある。それは未来を思考し得るという点である。ロボットは情報解析による先の予測はできても、未来にこうなって欲しいという願望を自ら抱くことはできない。つまり、ロボットは、過去から現在という一方向的な時間性によって、現在に最適化しているのに対し、人間は、過去・現在・未来という連綿と続く時間性を有し、それらの時間の中の今に生きているということである。人はこの未来性を有するからこそ、文学に希望を読み取れるのだと考える。

人とロボットの未来についての対応を比較することでその違いを明らかにし、その上で、人が有している時間の性質と、それによって文学を読むという行為の論理性を「古今和歌集」のいくつかの歌を具体例として明らかにしたい。

今に生きる「文学の力」を古典『竹取物語』の和歌の力に注目して考える

―『古今和歌集』仮名序の主張と韻文散文の特長をふまえつつ―

岩手大学教育学部准教授　田中　成行

古典の導入教材で定番教材である中学一年で学ぶ『竹取物語』の学生の感想は、冒頭の竹の中のかぐや姫の発見と、五人の貴公子の求婚者の難題失敗譚と、かぐや姫が月に帰る不思議さは覚えているが、特に感動はしないというものが多く、最後に帝が歌を歌うのかが分からないという意見も多い。また、高畑勲監督作品のアニメ映画『かぐや姫の物語』を多くの学生が見ており、帝は強引に連れて行こうとして失敗した悪者のイメージも強い。

それ故『源氏物語』の絵合巻で「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」と評価され、蓬生巻で光源氏との「心深き契り」を信じて待つ末摘花が読む「かぐや姫の物語」として描かれる『竹取物語』の価値を、当時の和歌の価値の規範とされた『古今和歌集』仮名序の冒頭文「大和歌は人の心を種として…たけき武士の心をも慰むるは歌なり」の価値観を中一で学び、それをふまえた上で和歌に注目して読み取ることを提案したい。それは短歌俳句の

創作活動時の大切な動機付けともなる。

作品の価値理解には原文を通読することが大切であるが、通読した学生は少なく、中学高校の教科書に載る一部分の内容で、よく分からぬ、面白くないと判断することが多い。実際の教育現場の限られた時間の中で全文通読することは難しく、教科書に載せる本文の精選が必要とされる。

中学の教科書を比較すると、六人目の求婚者の帝が、かぐや姫の袖を捉え連れ去ろうとした時姫が「きと影にな」って消えたので連れて行かぬと約束した事は、どれにも書かれていない。それ故その後の「三年間の和歌と手紙による文通」の心の籠もった言葉の力で「御心を互いに慰め」お互いの「深き心ざし」を育て合い最後の二人の和歌が詠まれる事と共に掲載することを提案したい。